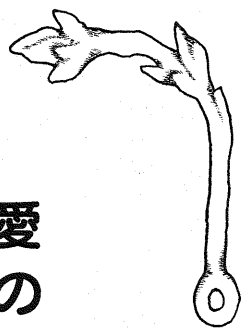


子どもの本から



愛の祭り イースター

大沢 啓子

若い頃、一人暮らしをしてみたいと思ったことがありましたが、結局そのチャンスもなく五十歳を越してしまいました。結婚するまでは両親のもとで姉と共に育ち、結婚してからは夫とその家族と一緒にいました。今は子ども達が生まれ育ち、私の家族ができて上がっています。

一人暮らしは気楽で良いと思っっている人もたくさんいるとは思いますが……、この主人公のうさぎはそうは思わなかったようです。

ある朝、うさぎは大きなニレの木の下で目を覚まし、友だちがほしくなりました。静まり返った森の中、あたりには若葉や花が咲きそろい、木々の間か

らは明るい陽の光がさしこんでいます。うさぎの新しい朝はこんなに美しく、光に満ちているのに、何か足りないようです。友だちになつてくれるうさぎがないのです。どこかにうさぎはいないかなと、ニレの枝でねむそうにしているふくろうに聞いてみると、「イースターはうさぎだらけじゃないか」という答えがかえつてきました。謎のようなふくろうの言葉にさそわれ、うさぎの旅が始まります。

イースターって何？ イースターってどこ？ うさぎはイースターを探せばそこに友だちがいると考えました。それはきつとイースト（東）の方だろうと思ひ東に向かつて歩きだしたのですが、どこまで行つても見つかりません。穏やかな日はかりではありません。嵐の日の落ち葉の中も、冷たい雪の山道も、うさぎのつらい孤独な旅は延々と続きます。

頁をめくつていくと、やさしいパステル調の絵が広がり、この美しい自然の中で旅を続けるあいだ、



◀ 『うさぎの だいじな みつけもの』
シャーロット・ゾロトウ作 ヘレン・クレイグ絵
松井るり子訳 ほるぷ出版 一九九八年

一人ぼっちのうさぎを応援するものの存在に気づきます。画面の初めから終わりまで、お供のようにねずみが一匹ついてきます。さらに、あたりには草花が咲きほこり、池には美しいマスが銀のうろこを光らせています。ヒナギクやマルハナバチ、小鳥たちも飛んでいます。雪の降る山道でさえもキツネやクマ、のねずみたちがうさぎを見守ってくれているのです。これらの動物や植物は読み手の気持ちをまきこんで、そつとうさぎを励ましているようです。

こんなにたくさん動物や植物に囲まれているのに、なぜ彼はそのことに気づきもせず、同じ「うさぎ」にこだわるのでしょうか。満たされないうさぎの気持ちは、やはり気になります。彼の探しているイースターとは何なのでしょう。

イースターはキリスト教の「復活祭」のことで、キリストが処刑され、その後この世に復活したことをお祝い日で、冬のクリスマスと並ぶキリスト教のお

祭りです。

またこの言葉は、ドイツ語でオステルン、古くは北欧神話の光と春の女神オステラに由来し、昔からゲルマンではこの時期に春を迎えるお祭りを行ってきました。

そしてユダヤ教ではこの日を「過越祭」として祝います。旧約聖書の出エジプト記にその話があります。ユダヤの民がモーゼによってエジプトから解放される前の晩、神の怒りで国中の長男が殺されることとなりましたが、羊の血を戸口に塗って印した家だけは過ぎ越していき、ユダヤの民の子どもの命が助かったというものです。過越祭は神の怒りを過ぎ越した喜びと民の解放の記念という二重のお祝いなのです。

この三つのお祭りが重なってイースターは世界の広い地域で春の祭典として盛大に行われていますが、どれにも共通することは「命のつながり」とい

うことです。北欧の冬、あらゆる生き物は死に絶えたと思われるほどの厳寒の山野にも、春の訪れにより草木や花が芽生え、新しい命が生まれる。何代にもわたった奴隷生活からの解放と、抹殺されるはずだった子ども達の命が救われ、民族の存続が新たに約束された。そして十字架にかけられ処刑されたはずのイエス・キリストの復活。どれも「死」を乗り越え次の命へとつながる喜びが祭となっているのです。

こう考えると、うさぎが「うさぎ」にこだわってイースターを探すのもうなずけます。明るい色調で細かいところまでユーモラスな絵からは深刻さはいかがえませんが、彼の旅もきつとつらい孤独な旅だったのでしょう。

ついにうさぎはめすのうさぎとめぐりあうことができ、二匹はニレの木の下にもどりました。そして間もなくたくさんの子うさぎが生まれ、フクロウの

言葉通りイースターはうさぎだらけになったのです。うさぎにとつてイースターを探しあててくることは未来へ命をつなぐ喜びをみつけること、家族の愛を育んでいくことだったのです。

ゾロトウのこの本は一九五九年、アメリカで出版されていますが、四十年経つたいま、クレイグの新しいイラストで再出版されました。この半世紀の間に家族や結婚の考え方は大きく変わりました。しかしいつまでも途切れることのない命と愛の問題は普遍です。人は一人で生きてきたのではなく、友を求め、伴侶を求め、家族が生まれ脈々と命をつないで歴史を作ってきたのです。クレイグの優しい絵は、ゾロトウのなげかけたこの大きな愛の問題を暖かいユーモアでつつみ、読み手に伝えています。

(舞々同人)